箕作秋吉の五度和声理論にみる異文化共存
――音楽の国際連盟を目指して――

安川智子，張　恵玲

1930 年に新興作曲家連盟を結成した中心人物の一人である箕作秋吉（1895－1971）は、日本固有の旋律に適した和声理論、いわゆる日本和声の理論を考案したことで知られている。しかし今日日本において、箕作の残した成果は歴史的一事象とみなされ、現代的意義をもつとは評価されていない。一方海外では近年日本の洋楽研究の中で、箕作の理論や作品が注目され、帝国主義との関連といった特定の文脈で論じられている（Galliano 2002; Herd 2004; Pacun 2012; Utz 2015）。こうした国内外の箕作評価は、世界大戦の時代に海軍に所属していたという箕作の立場や、そのために彼が自由な言論活動を制限されていたことにも影響されている可能性がある。そこで本稿では箕作の理論を「五度和声理論」と総称し、海外の研究を再検証することで、現在の箕作像の問題点を整理する。そして戦前から戦後にかけて、国際社会との関わりの中で、五度和声理論がいかに変遷したかに新たに着目することにより、箕作の理論がもつ意義を再評価する。

箕作の五度和声理論は、日本が国際連盟から脱退した翌年 1934 年に、独仏日の 3 ヶ国語で発表され、当初から独、仏、露、日の音楽的傾向を含み込んだ理論として構想されていた。継続的な理論の推敲過程では、ユダヤ系作曲家や日本独特の感性に対する配慮も含み込まれていく。1934 年の記事をきっかけに ISCM との関係を築き上げた箕作が理論に込めた理想は、音楽の国際連盟という ISCM の理念と重なり合うものであった。彼は「日本性」の主張よりも、古今東西の音楽組織と和声の共通性を客観的データによって示すことに重点を置いていた。最終的に世界音楽の思想に行き着く箕作の音楽理論は、日本が国際連合に加入する 1956 年前後に、小泉文夫の日本音階理論が新たに登場することで、その核となる部分が継承されていく。言葉が必ずしも真実を語れぬ時代に、対立する立場や民族の融和を音楽理論によって示していくという、箕作が果たした重要な役割が見えてきた。